

今日、8月の第一主日は、日本基督教団の暦において「平和聖日」と言われています。遡ること1962年に、被爆地広島県を含む西中国教区からの発案を受けて、教団総会で審議された結果、教団の年間行事に加えられました。日本基督教団以外ですと、日本カトリック教会が、毎年8月6日～15日までを「日本カトリック平和旬間」として定めて、平和をテーマとした映画会、講演会などを行っているそうです。このカトリック教会の平和行事も、遡ること1981年、当時のローマ教皇が広島を訪問し平和に関する提言を行ったことを契機として、翌1982年に年間行事に加えたとのこと。やはり、原爆投下、被爆地被害という傷跡は、日本のキリスト教界において忘れてはならない、記憶に留めるべきものとして理解されていると言えます。ちなみに、カトリック教会は、1月1日も「世界平和の日」として記念しています。これは、ベトナム戦争の最中に平和を祈り求める呼びかけをしたことが切っ掛けで、日本関連の戦争に留まらない、世界規模で組織されるカトリック教会らしい視野の広さがあると言えます。あと、調べた限りでは、仏教界、神道会には特定の戦争等を振り返っての平和を憶える行事は、あまり見られないようです。わずかな類例として2023年に和歌山県の浄土真宗では、和歌山市大空襲を憶えて追悼法要を行った記録があります。もちろん、どの宗教においても平和は大切なことなので、それぞれに祈り、願い求めることを続けていると思います。ただ、各宗教の暦に表れる特徴を見る限り、キリスト教は、平和への関心を独自に深めてきたように感じられます。

それは、もしかしたら、日本社会においてキリスト教が、国家に対する「見張りの役」を忘れずに・・・、正確に言うと、一度忘れたけれど、再び思い出して反省の内に歩もうとしている、ひたむきな信仰の姿なのかも知れません。

日本基督教団は、第二次世界大戦において明らかに戦争協力をしました。私の前任地である倉敷教会も、教会の鐘、金銭という意味では無くて、カランカランと鳴らす鐘ですね、これを日本軍に提供しました。武器に使う鉄が不足していたからです。また、キリスト教主義である同志社大学も、1943年に「戦闘機同志社号」を日本軍に献納したという記録が残っています。と言うような、各教会、各学校のレベルで戦争協力をした歴史的事実を、少なくとも日本基督教団は反省して、1967年、「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」という文章を、当時の教団議長鈴木正久牧師の名義で発表しています。

もっとも、細かいことを言うなら、これが教団名義による声明ではなく、教団議長名義であるところに、なかなか戦争責任というものに関して、一致し切れなかった葛藤が見え隠れしています。もちろん、強いられてする告白に意味はありませんから、日本基督教団の多様性という点では、それも已む得ないことであるとは思いますが。

ただ、少なくとも日本基督教団は、そういう声明を公にして、その上で毎年8月の第一主日を「平和聖日」として守っています。それは、普段意識することは少ないかも知れませんが、我々、日本のキリスト教が「平和の使者」であり「見張りの役」であることを神様から求められていながら、それを全うできなかった過去の過ちを反省し、これから将来に向けて、あるべき信仰の姿を整えていこうとしているわけです。

確かに、国によっては、第二次世界大戦の後にも、いくつもの戦争を経験し、今から80年前の戦争のことなど振り返りはしないかも知れませんが、私たちも、日露戦争、日清戦争、さらに古くて国内における戊辰戦争なんかは、歴史教科書で学ぶ程度です。そういった実例を取り上げて、「いつまでも80年前のことを思い出して、反省に暮れる必要はない、100年経っても続けるつもりですか？」と提言する論調があることは納得できます。

しかし、少なくとも私たちキリスト者にあっては、戦争の数が増えようと、戦争の無い日々が続こうと、「あの時のように、戦争に協力したら絶対に神様、悲しむよね」という反省の想いは受け継いでいかないといけません。やっぱりダメですよ、日々、平和を祈りながら、隣人愛を語りながら、いざ日本が戦争に向けて積極的に備えようとしている時。国へ献品したり、戦闘機納めたりしたら、それは御心に適っているとは、到底思えません。

日本全体が戦争の色に染まりつつある時に、日本基督教団や敦賀教会が、どこまで「平和の使者」や「見張りの役」として耐えられるか。そこには命懸けの葛藤があるでしょう。事実、日本基督教団が戦争協力していた当時、武生教会や如鷲教会が属する「ホーリネスの群」の一部の牧師は、教団と国に逆らって獄中死したという、まさに殉教を遂げています。そこまでの覚悟と信仰を持てるか、どうかは、正直わたしも自信はありません。

しかし、だからこそ、そういう極限状態に行き詰らないように、日頃から「見張りの役」としての自覚をもって、祈り、行動することが重要と言えます。幸いにして、日本は民主主義の国ですから。あと、報道の自由があって嘘と真を見分ける術も与えられているので、私たちも「見張りの役」をしやすい環境にあります。それも含めて、神様によって実現した今の社会に感謝して、私たちは出来得る限りの働きを為していきましょう。

ようやく聖書の御言葉に触れますが、時代が変わっても、人が変わっても、絶対に忘れてはいけないのは「平和を実現する人々は幸いである」ということです。平和って、高尚過ぎて手の届かないものでも、私たちの日常に関係のないものでもなくて、私たちの幸いに繋がることです。当たり前のことですが、当たり前過ぎて忘れそうになるので、ちょいちょい注意が必要ですね。

平和を実現する人々は幸いなんです。しかも、この幸いと言うのは、ギリシャ語でマカリオスと言うのですが、本来、このマカリオスが意味する幸せというのは、「神々の幸せ」ってことなんです。他のギリシャ語文献なんかに見られるマカリオスは、総じて人ではなく神の幸せについて言及するものです。だから、平和を実現する人々はマカリオスである、という時、それは人を超えた

存在が頂くような幸いを得ることができる、という意味になります。続く、「その人たちは神の子と呼ばれる」という御言葉にも繋がっていますね。

まあ、神々の幸せより、目の前の人間的幸せに満足する方が良いって考え方もあるとは思いますが。食べて寝て好きなこととして、世界の平和や国の平和よりも、自分個人の平和が優先されるということもあるでしょう。でも、そんな「今だけ、金だけ、自分だけ」の発想で、あらゆる水準の平和が壊れてきたことは、多分、想像できるかと思います。いや、その想像力が、この社会から失われること自体が大きな不幸と言えるかも知れません。

私個人としては、キリスト教って想像力豊かなものだと思います。2000年前の書物を読んで現在の生活に当てはめてみたり、まだ見ぬ未来に思いを馳せて希望を語ってみたり、「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい」と言って隣人の気持ちに寄り添ってみたり。と言うか、そもそも神様やイエス様や聖霊を感じて祈ること自体が信仰であり、また想像力の賜物ですよ。

想像力で世界を平和にできるのか、と問われたら、そんな魔法みたいなことはできないと答えます。でも、私が想像力をもって誰かに寄り添い、親切に振る舞って、その誰かが「世の中、捨てたもんじゃないな」と思ってくれたら、それって、確実に平和に一步近づいていますよね。想像力をもって、世の中の憎しみや、悲しみや、怒りや、不満に、少しでも理解を示して、対立ではなく対話を、誹謗中傷ではなく興味関心を持つことができるなら、それは「平和の使者」として十分な存在価値を示していると言えるんじゃないでしょうか。

怒りたいこと、責めたいことがあっても、心の片隅に「平和は幸せ」という約束を忘れずにいられたら良いなと思います。私自身もそうですね、自分の子ども達に対して、もっと平和な対応を取れるよう精進致します。子どもに限らず、身近な存在ほど、平和な世界の「外」に置いてしまいがちなのかも知れません。反省したいと思います。

この世から戦争を無くす、というのは、まあ、個人の力では無理な話です。それは、どんなに偉い人でも一緒です。利害関係があれば、そこに必ず衝突が生まれ、争いに発展します。でも、面倒臭がらずに、その争いの原因、衝突した理由、利害関係の絡み具合、そして、その奥にある個々人の不満や焦りにも想像力を広げて考えてみると、私たちにもできることってあるんじゃないかと思っています。

それは、ようするに親切にしてあげることです。この社会の不満や焦りを解きほぐすのは、減税とか子育て支援とか、そういう国の政策だけじゃありません。私たち一人ひとりの隣人愛と寄り添いだって大切な要です。もっとも、隣人愛や寄り添いにどれだけの効果があるのかと言えば、まあ、国政選挙における1票未満程度かも知れません。でも、それが隣人愛と寄り添いを実行しない理由にはならないでしょう。少しでも誰かに響き、誰かの励ましになるなら、そうすべきです。

「平和は幸せ」という最も根源的な約束を心に留めて。また、「世界平和も隣人愛から」と、たとえそう信じ切れない時があったとしても、でも忘れずに。平和の使者として、見張りの役として、

この地上での歩みを全うして参りましょう。お祈りを致します。

神様。今日、私たちは平和聖日礼拝を厳かな思いをもってお捧げしています。あなたが創られた、この世界に真の平和が実現しますように。また、その世界に住む者同士が、違いを認め合い、異質を受け入れ、穏やかで柔らかな関係性を創り出すことができますように。あなたが支え導いてください。あなたの似姿である私たち一人一人が平和の使者として、良きキリストの香りを放ち、また、見張りの役として、主の道を率先して歩む者となれますように。私たちの信仰を強め、励ましてください。

このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。

8月誕生者の祝福祈禱 詩編 138 編 7～8 節

地上の王は皆、あなたに感謝をささげます。あなたの口から出る仰せを彼らは聞きました。主の道について彼らは歌うでしょう／主の大いなる栄光を。主は高くいましても／低くされている者を見ておられます。遠くにいましても／傲慢な者を知っておられます。わたしが苦難の中を歩いているときにも／敵の怒りに遭っているときにも／わたしに命を得させてください。御手を遣わし、右の御手でお救いください。主はわたしのために／すべてを成し遂げてくださいます。主よ、あなたの慈しみが／とこしえにありますように。御手の業をどうか放さないでください。

神様。毎日とても暑い夏の日差しを感じつつ、私たちは、あなたに与えられた季節の中を過ごしています。山の緑や野の草花は、太陽の光に励まされ、力強くその存在を示しています。この暑さの中にも、あなたの恵みがあり、導きがあります。そんな8月の日々、あなたは敬愛すべき兄弟姉妹に命を与え、今日に至るまで支え導いてくださいました。8月生まれの方々のことを憶えて祝福と感謝の祈りを捧げます。夏の日差しを浴びて、いよいよ枝葉を広げる木々のように、この季節に命与えられた方々の人生を、あなたが力付けてください。また、人は一人で生きるのではなく、他者との助け合いの中で育まれ、今を生かされています。どうか、この8月生まれの方々を支える、ご親族、ご友人の上にも、あなたによる祝福がありますように祈ります。これらの祈りを、感謝をもって我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。